

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 女性週刊誌の社会心理学的分析

著者	亀谷 純雄
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．社会科学編
巻	25
ページ	29-54
発行年	1976-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/4615">http://hdl.handle.net/10114/4615</a>

## 女性週刊誌の社会心理学的分析

亀 谷 純 雄

## 一 前 提

ここに報告する女性週刊誌の分析に先だって、一つの調査を実施している。この調査は今回の事例研究に問題を継続させており、とくにその結果は、女性週刊誌へのアプローチの前提として、仮説部分を構成している。そこで本論に入る前に、この調査を概括しておくことにする。

女性観調査（一九七三年一月～二月実施）——現代女性の抱いている「女性像」のあり方を、当時ベストセラーであった浜尾実著『女の子の躰け方』<sup>注一</sup>（光文社刊）の所論を質問紙に組み「そう思う」「そう思わない」の軸で反応を調べ検討した。各質問に対する賛否をなざると、ある傾向が浮びあがってくる。それは被験者が意識する、しないにかかわらず、自分自身に対する質問に投影された像（イメージ）と考えることができる。対象群としてOL、主婦、女子短大生を、また、コントロール群として男子学生のサンプルを設定した。以下その結果の特徴を、かなりラフなスケッチではあるが列記してみる。

A 「女性の傾性」を規定する宿命論（とくに生物学主義的な諸論——素質論）が男女差なく、かなりの広がりで定着している。

B Aに関連して、単なる前近代的宿命論（身分としての女性の地位）に対する傾斜はみられないが、男子学生、女子短大生の中に、「以心伝心」的な家イメージに回帰する傾向がみられる。慰安の場としての「家」と、反面その中で女性の精神的強さ——男の支えとしての「女性像」をみている。

C 近代的契約関係の中での女性観は、物化された商品としての特性が強調され、人格としての自立が陰蔽される。人間関係をとり結ぶ技術論として、あるいは結婚のための商品価値を上げる手段として強調される。

D 家のイメージは、Bの結果に重なる。慰安の場としての家。その中で女性の役割をみている。さらに、Cの結果を引きつれ、家での人間関係は「人格」としての出会い（摩擦）を避けるような「見られる（観賞される）自分」「見せる自分」という物としての表層の関係として扱えられている。

E 唯一積極的意味での「女性」評価は、家庭での育児・しつけに關してである。ただここでも、女性の職分を家庭内に針づけした上で、育児・しつけに意味を見いだしているということでは、前掲の内容と矛盾しない。

これらの結果は、質問紙全般に涉って被験者が、浜尾実氏の意見に賛成しているということではない。かなりの部分で切りすてられた質問がある。しかし、調査結果の特徴を関連づけて考えると、著者の基本的考えとかなり一致する部分を見い出すことができる。この質問が（したがって浜尾実氏の所論が）一見前近代的な身分関係を前提にした女性像を展開しているようにみえるものの、実は権力主体、社会的労働の主役としての男社会の論理を中心に論じられていることが明瞭である。その考え方の根拠は、近代的常識をいうまでもない常識と前提した上で、それをたてまえたとしての「女性の本性」としてすりかえてしまっている所にその特徴があると言えよう。たとえば、「女性は感性的動物」と言ったときに、男性が理性的であるという意味を裏がわに内包する。それは、一目してダーウィニズムが到達した、生物学主義的論拠であり、適者生存という社会構造の反映であることを自明なこととして成立している。にもかかわらず、それらの所論の展開（したがって質問）が、一様に伝統的な倫理と近密な関係として現われて

おり、同時に、これらの論理に被験者の大半が足をすくわれる結果となっている。調査結果の分析にあたり、というより作業仮説として、回答を分化——未分化<sup>注三</sup>、近代——前近代の軸を二次元にクロスさせ、各領域にプロットすることで傾向をみようと試みたが、結果に一元性が見られなかった。とくに近代、前近代の指標では、あらかじめ分類しておいた質問群と、回答に全く対応がなかった。これは、分類軸につかた、近代・前近代という概念の内容に混乱があるかもしれない。用語法としては、一般的であるが、その使われかたは一樣ではないからである。しかし、材料につかた「女の子の躰け方」から質問として一センテンスを引きだすと、その限りにおいては、大雄把に言って、新旧を分けることは可能である。たとえば、「妻は夫を喜ばせ、なぐさめるために化粧をすべきである」「女の子に要求されるのは、すみずみまでいきとどきめ細かな神経と、将来夫や子どもを助け育てていく、持続的に発揮されるべき忍耐強い心である」「女の子はたとえ知っていても知ったかぶりしてはいけない」「女の子には、女らしい言葉づかいを教えるべきである」など、女性の美徳や、心がまえについて語っている項目は、当然前近代と分類した。しかし、前二つの質問には、女性のサンプルは反対を表わし、後者の質問には賛成する。これは、質問紙法の限界であるかもしれない。元の材料から前後の文脈を切りはなし、一つのセンテンスの意味内容によって判断を決定させているからである。しかしながら実験者は、材料全部に目を通し前後の文脈を了解したうえで、質問に組んだわけで、結果の解析を通し、回答を相対化することによって分類軸の再考をせまられたのであって、一概に方法の限界に問題を解消させるわけにはいかない。

そこで回答傾向の検討をもとに、いわゆる前近代的な質問群として判定したものが、近代的な常識に混じって選択されている事実について、次のような仮説をえた。これは、浜尾実氏の著作について、くわしい吟味を加えることでより明らかになる問題ではあるが、前近代性と近代性は対立概念として使われてはおらず、明治以来の近代社会に対応した意味での皇室の教育は、非常にモダン（現代的）な様相を持っている。いわゆる、新らしさの中にふるさの名残りを保存するという意味において、家・女・主婦像が展開されているのではなく、それらの表層を現代に転化しているのである。したがって、ふるさの新しさ、という意味あいをもっている。厳密にいうとそれは、前近代性

といったものではなく、明治以来一〇〇余年の日本近代の軌跡に歩調を合わせた、最も現代的な考え方であるといえる。前近代的な女性の社会的基盤はすでに消失し、思想体系や、あるいは意識下に沈澱した信念体系に旧態が保存されているという見解は、それなりに意味があると思われるが、それらが発現され、現代に生きていることを考えると、現実と意識の乖離、ギャップというだけでなく、それらを保障している社会的基盤と密接な連関を持っており、一見前近代的論拠とみえる意見が、近代的・資本主義的な価値意識に根拠をもっている。

前提が長くなったので、この調査結果の記述はこのへんで止めておくが、これらの結果は、仮説というにはまだ煮つまりきれてはいないが、今回の研究の前提部分をなしている。

注一 著者は元東宮侍従、皇太子、浩宮、礼宮の養育係を務める。本著は退官後すぐまとめられたもので、皇室教育の一般

向けという体裁・内容をもつ。前書を見ると『女の子を育てていच्छるご両親……結婚生活を目前にひかえているお嬢さん、そして女学生のみなさんに読んでいただきたい……』となっている。

注二 質問は、女性像に言及している項目から、原文または意味に変更がない程度にアレンジしたセンテンス五三を選んだ。

注三 この分類指標は、T S T (二〇答法)の分析のための指標で、テストそのものは M E T H (1987)らによって開発された。それを、我われは自己、集団、社会意識およびそれらの相互関係を明らかにするためのものとして作りかえた。

分化とは、対象の規定にかかわるもので、対象そのものの性質を客観的に描きだした記述である。未分化は、対象の規定が弱く、修飾的、心情的なものである。

## 二、女性週刊誌分析の目的と手続

前回の調査結果を、七三年時点における女性観の主導的な現われと前提した上で、

一、女性観を支えている価値軸を、時間の経過にそって相対化する中で、今日の特徴を把握する。

## 記事分類指標（ジャンルの特徴）

1. 政治・経済……………新聞の一二面に当る。
2. 社会面……………事件記事（三面記事），事件を手がかりの  
仮名記事（実話小説風）。
3. トピックス……………事件をコラム風にコラージュした記事。
4. ルポルタージュ……………社会性の強い事件をドキュメントした記事  
（署名入り記事が多い）。
5. 皇室……………外国の皇室記事は含まず（ゴシップに入る）。
6. 芸能，ゴシップ……………芸能人に関連した記事全てを含む（TV欄  
にあっても，番組案内以外はここに含む。占い，  
身の上相談の項でも芸能人対象の記事を含む）。
7. 暮らし……………生活・家庭に近密な政治・経済記事（例え  
ば，物価，公害など）
8. おしゃれ，ファッション……………衣服，装身具，化粧品など（作り方の仕様が  
ついているものは，実用記事のジャンルに入る）。
9. 手芸・料理・ショッピング……………家庭経済の中で，生活を実現させるために  
必要だと思われる必需品への嗜好記事。
10. 作法・マナー……………おけいごと，式礼，テーブルマナー，人  
とのつき合い術。
11. 男・セックス
12. 女・生き方
13. 結婚
14. 旅行・レジャー……………グラビアの風景記事，たべ歩き記事を含む。
15. 映画・TV・演劇
16. マンガ，小説
17. 占い，身の上相談
18. 広告
19. その他

二、とくに六〇年代初頭から、今日に到る女性像の軌跡を、女性週刊誌の報道量・内容の変遷を手がかりにして明らかにする。<sup>注一・注二</sup>

対象…週刊女性——一九六一年～七四年までの一四四年間につき、各年ごとに一月、三月、七月、一〇月、十二月（各シーズンの特徴がよくでていると思われる月を選択）の中から各々ランダムに五冊抽出。ただし該当月が欠号の場合、前後の月にふりかえた。また、それも欠号の場合にはサンプルからはずした。三冊以下のサンプルで処理した年は、六一年二冊、六二年一冊、六三年三冊、七四年一冊である。サンプル総数五四。

方法…週刊誌を一九のジャンルに分け、ページ数をカウント。その比を時系列に比較検討する。さらに、ジャンルの分布の変動点、および社会的変動を節に記事内容の分析をする。量的比較は原則として年平均の数字を使用。

注一 女性週刊誌の発刊は、一九五七年二月『週刊女性』から始まり、五八年十二月『女性自身』と続き、今日の女性週刊誌の二本柱になっている。それまでの女性向誌は、主に月刊であり、五〇年代後半から六〇年代にかけて、これら週刊誌が量的に女性を対象にした主要メディアになっていく。ちなみに、五八年～五九年は、いわゆる週刊誌ブームがおとずれ、それまでの新聞社系の週刊誌に対して、雑誌社系の週刊誌が、今までとちがった内容を盛りこみ発刊が続く。『週刊新潮』をかわきりに『週刊現代』『週刊文春』『週刊平凡』『週刊時事』『週刊公論』『週刊明星』『少年マガジン』『少年サンデー』『週刊ベースボール』『週刊大衆』などがこの時期に集中する。

注二 今回の分析は、一応マス・メディア分析の手法をかりておこなわれるが、その目的は、女性週刊誌に現われた（表わされた）女性像の典型を、時系列に検討しながら抽出することにある。したがって、その意味を解析するにあたって、記事量の変遷を手がかりにすると同時に、六〇年代の社会状況の節を事前に検討し、それとの関連で見えていくことになる。そのため、「風俗」「政治・経済」「教育」などの年布を作成している。（スペースの都合で省略）

前回との調査の関連でいえば、社会意識（とくに女性観について）は、受け手に投映された、情報系に依存するわけで、その意味で意識の規定要因としてのマス・メディアの分析という関係になる。しかし、ここではそのことにあまり注意をはらっていない。その理由の一つは、いわゆるマス・メディア（報道）分析の手法が、受け手の受け内容に対するメディアのインパクトとして問題にされ、量的変数によって代替されるからである。その意味での客観的方法が、反面、結果の現象的記述に終ってしまい、問題領域と調査者との価値的な連関を切断してしまうからである。したがって、今回

Table 1. 平均ページ数と年間の伸び率

年	61	62	63	64	65	66	67
平均ページ数	120	131	163	178	184	166	171
伸び率	100	109	136	148	153	138	143
年	68	69	70	71	72	73	74
平均ページ数	174	185	219	206	203	211	218
伸び率	145	154	183	172	169	176	182

の研究を事例研究としたのである。しかし、メディア分析の手法の全部を否定するわけではなく、むしろこれらを手がかりにして、対象にせまる必要がある。その意味で今回もその方法をかりている。

### 三 週刊誌の記事量の変遷

#### 総ページ数の推移

一四年間の総ページ数の変化をみると、直線的な増加傾向ではなく、かなりの振巾がみられる。六一年を一〇〇とすると六五年一五三と、この五年間で急激なページ増がみられる。六六年から六九年までは増減傾向は小さく、七〇年になり一八三と、ページ数を一年で二倍弱にしている。七〇年以降また横ばいの状態が続く。全体では、六四、五年での急増、七〇年を是んで三区分されるようにみえる。ちなみに、週刊誌の価格をみると、六一年四〇円、六五年六〇円、六八年八〇円、七〇年九〇円、七四年一三〇円となっている。

#### 「グラビア」ページの推移

女性週刊誌の特色は表紙に現われている。発刊当時は、表紙に外人モデルを使い、カラフルな形態で視覚的印象を強くしている。ただ一四年間を通覧すると、傾向は意外と不統一で、表紙にモデルを使うことは変わらないが、外国人から日本人になったり、一人から複数になったり、スターになったりして、かなりそれが頻繁に交わっている。

そこで視覚的印象（ハダさ）を計る指標としてグラビア頁を見てみた。グラビアは、週刊誌の前後と中間にあり、広告、写真記事がその中心である。ページ比は、



(パーセント)

年	61	62	63	64	65	66	67
グラビア	32.1	36.7	22.7	27.2	34.8	32.7	38.5
カラー	6.2	15.3	13.5	10.3	14.7	15.2	24.6
年	68	69	70	71	72	73	74
グラビア	32.1	30.8	34.5	30.1	29.9	31.5	32.4
カラー	21.6	20.4	23.2	22.3	21.4	22.0	23.9

六一年から七四年までは三割前後であり変化がない。

ただ、カラーページ比を求めると、六六年一五%、六七年二五%となり、ここを境に二割強がカラーページにさかれ七四年まで続く。しかし、全体としての量的推移は思ったほど大きな動きはないが、総ページの三割を「読む記事」よりも「見る記事」にさいていることはみのがせない。女性週刊誌の特色をよく現わしているといえよう。

グラビア中の記事・広告比は、六一年六一%・三九%、六五年七三%・二七%、六八年六五%・三五%、七〇年六二%・三八%、七三年五五%・四五%とそれぞれ記事比が高いが、微少ではあるが記事比は減少する傾向にある。

記事グラビアの中で、ページ数を多くさいているものは、六一年では一位にスター記事(四九%)、二位旅・レジャー(二八%)。六五年スター(四〇%)、ファッション(二五%)、旅・レジャー(一四%)。七〇年スター(五二%)、ファッション(七%)。七三年スター(五〇%)、ファッション(一七%)という順になる。こうみるとグラビアページの主要記事は(数量的に増減はあるが)スターの記事である。とくにこれが女性週刊誌の顔であり、売りものであることが分かる。次いで、ファッション、旅行、レジャー記事が入る。数字は一樣ではないが、他に料理・手芸・美容などが比較的高い。美容記事をファッションに含めると、ゴシップに連なるスター記事をトップに、まん中にファッション・美容、旅行・レジャー記事をはさみ、次いで料理・手芸など家庭生活に近接する実用記事という三つの柱がみえ、女性週刊誌の記事内容の典型が、その顔といふべきグラビアの中に現われている。

# ジャンル間の関連とその記事量の推移

前掲の一九の記事分類指標にしたがって、年毎に全ページを分類し、その変遷をみると次のような特徴が現われる。六一年では、「広告」比がトップで二二％。次いで「芸能・ゴシップ」一五％、「マンガ・小説」一一％、「手芸・料理・ショッピング（実用記事）」一〇％、「旅行・レジャー」九％である。これを七三年と比較すると「広告」と「芸能・ゴシップ」の順位が逆転する。それぞれ二一％、二二％である。次いで「マンガ・小説」二一％。順位に入れかわりがあるものの、この三領域の量比は拮抗しており、全体の六三％をも占めている。六一年時点では、この三領域の占める割合は四八％である。

このことから、六一年では記事量の多少はあるが、各ジャンルに分散していたといえよう。七三年では、以上の三つに続き「手芸・料理・ショッピング」がみられる。

時系列にみると、「芸能・ゴシップ」と「広告」比が反転するのは、一九六五年からである。それ以降、割合は拮抗しながら七四年まで続く。「実用記事」は年による増減を無視すると、平均的に四あるいは五番目に位置し恒常的に女性週刊誌の中に定着しているといえよう。（ただし、その内容には、かなりの変化がみられる（後述））

もう少し年にそって傾向をみると、六五年では、「芸能・ゴシップ」一九％、「広告」一八％、「おしゃれ・ファッション」一一％、「旅行・レジャー」九％、「実用記事」九％の順になる。この頃まで記事量は、「芸能・ゴシップ」「広告」以外のものの割合が比較的高い。とくに、「手芸・料理・ショッピング（実用記事）」「旅行・レジャー」「おしゃれ・ファッション」など生活に役立つような、実用的側面が強い記事が多いといえる（後述）。

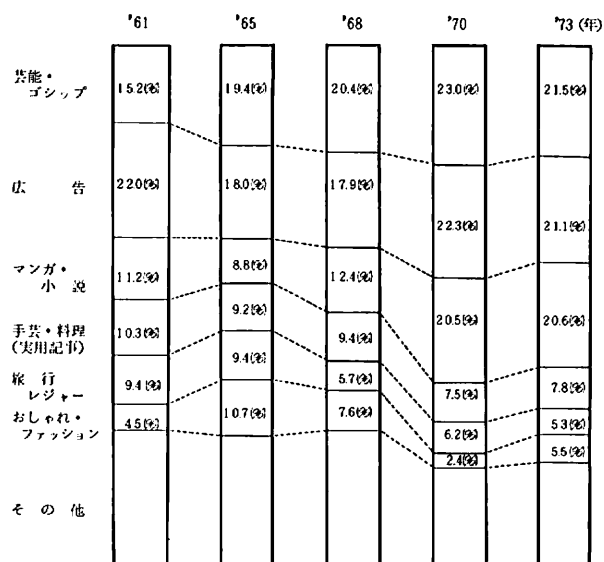
六八年は、それ以前の傾向に似ているが、ただ「マンガ・小説」の比が高くなっている。これは、この年から女性週刊誌にはじめて劇画が登場したからである。これ以後、劇画の占める比が増大し、同時に「芸能・ゴシップ」「広告」の割合も上昇する。他のジャンルの割合は漸減の傾向をみせる。

Table 3.

(パーセント)

年	'61	'65	'68	'70	'73
政治・経済	1.5	0.0	0.3	0.0	0.0
社 会 面	3.7	2.3	6.8	2.9	3.7
トピックス	2.4	1.0	1.7	1.5	0.0
ル        ポ	1.5	2.8	0.4	1.0	0.0
暮        し	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0
作法マナー	0.0	0.0	1.1	1.6	0.0
男・セックス	1.4	5.5	4.3	2.0	1.7
女・生き方	3.8	1.4	0.5	0.0	0.7
結        婚	2.0	2.1	1.1	0.7	3.1
小        計	7.2	9.0	7.0	4.3	5.5

Fig 1.



女性週刊誌の中で最もあつかいの少ない領域は、「政治・経済」「社会面」「トピックス」「ルポルタージュ」などの社会性の強い記事である。いわゆる新聞の一面、二、三面にあたる部分はないに等しい。また、記事としては似ている「暮らし」についても少い。「暮らし」記事は、単に社会的記事というより、台所・家庭と直結しているものとして見通しをたてたのだが、意外である。「社会面」が若干割合が高いのは、事件をテーマにした、いわゆるノンフィクション・ノベルを付け加えたからである。

また、比較的女性週刊誌の中心をなすと推測された「作法・マナー」「男・セックス」「女・生き方」「結婚」についても割合が低い。これらの問題を正面にすえた記事が少いことは注目される。

### ジャンル別の特徴

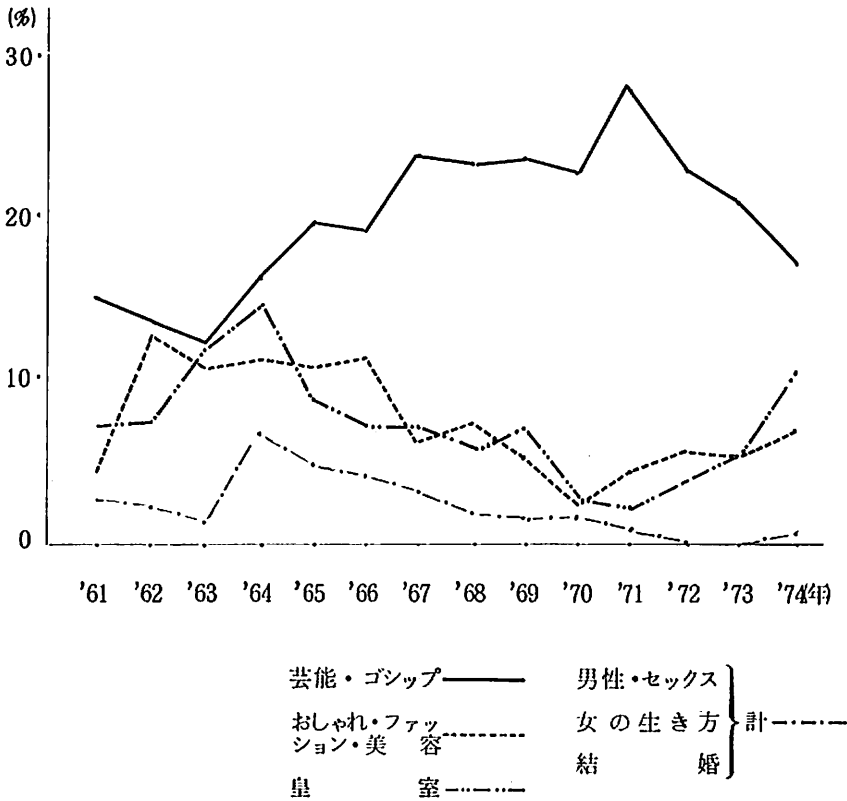
**A 芸能・ゴシップ** 六一年から七一年まで急激なページ増がみられ、一五%→二九%となる。七一年を境に七四年には→一八%と下降する。この領域のピークは、六七年→七三年までが目立ち二〇%を越えている。

七一年までの急増は、その他のジャンル比を下降させ、「芸能・ゴシップ」欄に吸収している。とくに「男・セックス」「女・生き方」「結婚」の計をみると、七一年まで下降しており「芸能・ゴシップ」に相対している。この記事量(比)の増大は、もじどおりゴシップ、スター記事の増大であり、報道の基調は変化がないようにみえる。

他のジャンルの吸収の例では、「夫婦の対談」という欄が、芸能人夫婦に移行したり「新婚日記」の欄が一般読者から、これも有名人に移っているように、様々なジャンルを代替していく傾向になる。さらに、テレビを中心とした有名人記事の増加もみのがせない。

**B おしゃれ・ファッション・美容** この領域は、予想と違って六六年→六七年にかけて減少し、七〇年を底に上昇しているとはいえ、全体としては下降傾向にあるといえる。ただ、年々「おしゃれ・ファッション・美容」は、記

Fig 2



事の中よりもグラビアに比重を移している。とくに七〇年以降は、グラビアを中心に記載されていることが分かる。(六一年記四二%、グ五八%) (六五年記三五%、グ六五%) (六一年記二四%、グ七六%) (七〇年記一七%、グ八三%) (七四年記六%、グ九四%)。この傾向は、記事比の高い六六年頃には「実用記事」に近く、それ以降視覚化していることを示している。

そこでグラビア中の、この領域の広告の上昇が、年々の下降を補足しているのではないかという前提で調べると、そうでもなく広告比は一定していることが分かった。通覧すると、「おしゃれ・ファッション」記事は、女性週刊誌の主要な領域であると考えられたが、むしろ減少傾向にあるといえる。速断は出来ないが、女性向雑誌の専門化が、この結果の回答になるかもしれない。

C 皇室 女性週刊誌のセールス・ポイントだといわれている「皇室」記事は、六四年をピークに漸減し続け、七〇年代に入って微少な記事量となる。もはや、女性週刊誌にとって主要な記事になっていない。六四年の山は、「義宮」の結婚記事による。ただ、減少したといっても、七〇年までは、サンプル中一ヶ月を除く月全部に記事があり、頻度が高かった。しかし、それ以降記載頻度も減少し、記事よりもグラビアあつかいが相対的に増加する。

D 男・セックス、女・生き方、結婚 この項は前述したように、女性週刊誌という性格からすると少いといえる。「男・セックス」「女・生き方」は、通覧すると非連続で、ある月の特集として組まれていることが多い。それに対して「結婚」記事は、わりと長期な特集としてあつかわれており、量としては小さいが連続し記載頻度が高い傾向にある。(以下「政治・経済」「社会面」「ルポルタージュ」「トピックス」「暮し」「手芸・料理・ショッピング」「マンガ・映画・小説」の項目についての量的な変化については、枚数の都合で省略するが、次の章でその内容にふれることにする。)

## 四 内容分析

ここでは、前段で分析した女性週刊誌の記事量の変動を手掛りにして、記事の内容に現われた「女性像」を掘り出し、それをささえている女性観を検討する。だがひとまず、内容にたち入る前に、女性週刊誌全体のプロフィールの特徴を時間軸にそって明らかにしてみよう。

数字からみると、「芸能・ゴシップ」欄の増加が、他のジャンルの減少と見合っており、多様な情報がけずられ、特色がなくなっている。ただ、それが特色だといえ、そういえないこともない。しかし、前述したように、私たちが容易に前提にすることの出来る「おしゃれ・ファッション」「美容」などの女性向の話題は増加せず、むしろ減っているし、「手芸・料理・ショッピング」などの実用的（家庭生活にある意味で役立つ）記事も影がうすくなっている。さらに、「結婚」「女・生き方」「男・セックス」記事は、内容はとにかく数量的には週刊誌の重要な部分ではないといっている。ここで週刊誌編集の方向性や出版界の事情などについて云々することはできないが、女性週刊誌の記事の特殊性として選択したジャンルが、芸能・ゴシップ欄に吸収していくには、一定の外的な状況と見合っていることは見のがせない。内容の変化（あつかわれ方）も、もちろん重要ではあるが、とくに「皇室」記事は、一九五九年の「皇太子結婚」を頂点に、女性週刊の主要部分を占めていたものが、「常陸宮の結婚」から以降漸減している。論調の変遷をみなければ十分ではないが、皇室の「結婚」から「出産」「育児」の順に話題が転換し、次第に中心的な話題がぼけていくにつれて量も減少していく。これらのことが芸能・ゴシップと反比例していくことの一つの理由であろう。ただ、皇室記事の状況との係りはそれほど直接的ではないが、それぞれの年代に、タイミングよく重要な登場の仕方をみせている（後述）。

もっとも端的に係りをみせていると思われる項目に、「政治・経済」「社会面」「トピックス」「ルポルタージュ」「暮らし」がある。「暮らし」を別にすれば他は、女性週刊誌の主要な内容を占めないだろうということは、うなずけるが、六〇年代初頭には、これらの記事が比較的に見うけられた。六五年以前では、例えば「ルポルタージュ」に六一年二月

『異境ドミニカに移民の夢やぶれて』、六二年六月『死をみつめて雨の水壁に一〇日間』、六五年一〇月『あなたの異常出産の危険率、かよちゃん一七才精薄の青春』などがみられた。量的には小さいが記載頻度が高いのが特徴であるが、六六年、それ以降はほとんどでてこない。また出現しても、七〇年『(新連載ノンフィクション) 娼婦田鶴子の報告』とか『一四ヶ月の胎児がお腹の中から母親と会話』などと、フィクショナルでいてまた猟奇的色彩が強い。いわばゴシップめいてくるのである。「社会面」も同様に、六五年を境に、たとえば七〇年から『事件の中の女性』というタイトルで実話小説風にアレンジした記事がはじまり、それ以後今日まで続いている。

「暮らし」記事も、六二年には『生活科学レポート』というタイトルで『豊かな食卓ができない―物価高からくらしを守る三つの秘訣』などという記事がみられる。六四年『人生の写真真をあなたの手で、田中まり子さんの銀行レポート』など生活記事の記載が見られるが、六五年以降なくなる。七〇年代の生活破壊の状況は、女性週刊誌に一向反映される様子がない。

このように、まだ六〇年代前半までは、「政治・経済」「トピックス」「ルポルタージュ」「社会面」でも女性週刊誌に顔をだす予地があり、いわゆる社会的広がり、生活との関連をある程度推測することができる。またそれ以前にさかのぼると、分析の対象外ではあるが、女性週刊誌発刊の意図が、月刊婦人向誌と違った特徴を持って出現したのは、その点にあったとさえ言われている。こうみると、六五年前後を一つの屈折点とみることができる。さらに、全体のページ数の推移や、ジャンルの分布率をみると七〇年にもう一つの変化をみることができる。七〇年前後の屈折は、先ほどから「芸能・ゴシップ」の増大を強調しすぎたかもしれないが、この項目の下降と、「おしゃれ・ファッション」「男・セックス、女・生き方、結婚」の上昇として現われている。ただし、この傾向は、単なる増減ではなく、「男・セックス、女・生き方、結婚」が、ある月に比較的量の多い特集を組むことに原因している。したがって、全体の比率変動が大きくみえる。だがそれが七〇年代の特徴の一つだと言えないこともない。同じ企画の連載が減り、月々によって違う特集記事を組む。短期の見通しによる記事編成ということだろうか？とすれば、「芸能・ゴシップ」に性格が非常に似てくる。もう一つの特色は、「ファッション」に見られるような、モード化の現象である。



数字はあげてないが「旅・レジャー」記事は、六〇年代前半では、地図やルートまで示した実用的な様子であったのが、この期になると、グラビアに移動してきて、内容も、写真組みの「外国の風景」であったり「街並み」であったりする。これらの現象は、すでに六七・八年から現われている。六七年から「家」づくりの記事が始まるが、七一年にはそれに「インテリア」記事がグラビアで加わる。また、「料理」が六七年から「クッキング・カード」という体裁をとりグラビアで登場してくる。

このように七〇年の変化は、情報が視覚化してくると同時に、ジャンルの集中がみられる。（これは、六〇年代後半から続く）。それでありながら、その中で月々の記事の連係が不ぞろいで分散しているのが特徴だと言えよう。

通覧すると、六五年までは、高度経済成長といわれた上昇期にあたり六〇年後半で次第にその破たんが露呈しはじめ、七〇年代に至って破たんが確実なものになっていく。いわゆる不況の年代である。これらの状況の節が、週刊誌変化と符合している。以上の言い方は、非常に荒っぽい規定の仕方ではあるが、もう一つついで内容に立至ると例えば、高度経済成長が、「入づくり」であったり「マイ・ホーム主義」であったり、あるいは、六〇年後半には「共働き」が「モーレツ社員」がみられるように、社会的状況の、そして、その変動の大きさがよく反映されている。しかし、ここでの意味づけはこれまでにする。次節で記事内容にふれながら再検討することにする。

ただし、外的状況との関わりは、一義的で直線的であるなどとは毛頭考えていない。たとえば、六五年の劇画のブームは、女性週刊誌には三年おくれてやってくる。六八年からはじめて劇画が載るようになるのだが、このタイム・ラグをみても、送り手と受け手の関係によって修正、補正されている。

#### ジャンル別内容

手続…女性週刊誌の量分析の結果から、記事量の屈折点と思われる年およびその前後、全五年を選び、各年からラウンドに一冊ずつ抽出する。選択年は、六一年、六五年、六七年、七〇年、七四年である。なお、記事によっては、一四年間にわたっていないものもあり、また、抽出年に記載がみられないものもあるので、分析記事の特徴によって

抽出年を変更した。対象としたジャンルは、「身の上相談」「結婚」「男・セックス」「女・生き方」「作法・マナー」「皇室」である。「芸能・ゴシップ」については、データー量が膨大で未整理であるため、今後の課題として残してある。ここでは、これらの記事の、目次、記事タイトル(見出し)、小見出しについて内容との関わりで比較検討する方法をとった。

身の上相談 目立たしい形で週刊誌に「身の上相談」が登場したのは、六六年からである。「わが愛の悩み」というタイトルでの連載物である。量は、見聞き四ページの体裁をとっており、時に五ページに増えることもあるが、新聞などの身の上相談に比べ、ボリュームが多いのが特徴である。内容も、一篇の物語になっており、かなり虚構性が強い読み物のかたちをとっている。相談件数は、通常二つで、それぞれにかこみとして、アドバイザーの意見が付いている。この欄の登場は、六七年からの「芸能・ゴシップ」欄の増加に見合っており、内容はこれに近い。したがって読者の生の声が反映されているとはいいたいだが、それなりに、その時期にみあった悩み、問題がとりあげられていて興味ぶかい。

六六年から七三年を通覧すると、悩みは一貫して「結婚」の問題であることが分かる。六六年では、この「わが愛の悩み」のサブタイトルは、『未婚女性の切実な悩みを解決するシリーズ』となっており、『愛の悩み』は結婚をめぐるものであり、と同時に「未婚女性の結婚相談」といったところに中心的な話題がある。「悩み」の一例をみると、ここでは結婚(式)の「形態」の問題で、両親との対立があり、新しい形式での結婚を主張する相手と、今までの形に固執する両親との摩擦といった、新旧世代対立の典型的パターンがみられる。しかし、ここでの対立者は、相談者自身ではなく、自分の相手と両親の間の衝突であり、たとえそれが、結婚の仕方(形態)の問題であるにせよ相談者のこの問題へのかかわりは、対立者にゲタをあずけたまま右往左往しているだけである。六六年という年代をブラインドにすると、その中味は、もっとふるくへさかのぼるようにみえる。

Table 4 身の上相談

六六年 ．新しい結婚式を主張する彼と両親の意見が食い違つて……（二五才、未婚 O L）

．叔父の経営する美人喫茶で働くのを彼に反対されて……（二三才、未 学生）

六八年 ．全く対照的な二人の男性に愛を告白されて……（二一才、未 O L）

．既婚者には可愛がられるが独身の男性には声をかけられない……（二八才、離婚あり O L）

七〇年 ．再燃した私たちの初恋……でも、彼には妻子、私にも夫が——たがいに結婚している身とはいえ本当なら彼と私が結ばれるはずだった。私も彼もまちがった結婚をした……（二五才、主婦）

七三年 ．結婚を約束された同棲だけど、異性にだらしない彼の素顔を知り——同棲といつても、親にも認められた私たちには結婚と同じだった。でも彼には過去に二人の女性がいたのです。しかもその一人とは、いまでも関係が……（二三才、未 無職）

六六年では、結婚相手の選択をせまられた相談者の悩みと、結婚相手をさがしている女性の悩みが並置されている。ここでは、結婚に対しての考えは無前提にあるものの、一応、自分が「自分の相手」をさがす、決めるというところにポイントがある。しかし内容を見ると、相談者の位置は、自分や相手が誠実であるという所にあり、そこから一歩もふみでない。したがって、「まじめに」結婚を考えるということは、いかに自分が、真面目で誠実であるかを強調することであり、それをまた、自分の相手の判断の規準にする。いわば、人間評価の抽象的軸が強調されているにすぎず、人格的主体の出会い、あるいは対立が切りおとされる。そこで相談者の「悩み」は、いわゆる観念化された結婚の理想像へと解消していく。

七〇年では、二人の愛が問題にされている。『再燃した私たちの初恋……』とあるが、ここでの初恋は、単なる追憶としてではなく、相談者とその相手の現在の出会いを中心に悩みが述べられている。そこで結婚は『私も彼も』『まちがった』結婚であり、評価はマイナスである。しかし、結局のところ悩みは、『子ども』や、『夫』といった障害の前で、今までの結婚生活とか家庭に吸収されていってしまう。一種の予定調和の世界であって、結婚から、結婚生活、家庭生活、それによって生ずる夫や子どもとの関係は、いうまでもない前提としてある。『悩み』の視点は『突然出会った初恋の人』にあるのではなく、その前提にある。愛とみえたものが、結婚生活や家庭への不満のうらがえしとして現われているだけで、それもつまる所、相談者の人格をかけて対立するものではなく、せおわなければならない必然として以前目の前にある。

七三年では、親や家庭が対立物になっていない。『親に認められた同棲』であって、それは『結婚を約束された』という意味でやはり結婚に連なるが、相手との出会いを気にしている。結婚は、形態、家庭や親からの軋轢から自由になったものの、『親に認められた』同棲であり、それは、結婚・を前提にした了解である。話題としての新しさとは別に、ここでも『誠実』『貞淑』が、相談者の興味の中心にある。形はかわっても、それ以前の相談の紋切型が尾が引いている。

ただし、七〇年、七三年と、『わが愛の悩み』のサブタイトルは『若い女性の切実な悩みを解決するシリーズ』となっており、未婚女性から、若い女性へと相談の対象範囲を広げているのが特徴である。結婚相談だけでなく、家庭生活やそれ以外での場での人間関係の障害へと悩みの対象は広がっていく。女性週刊誌の編集上の問題ということを見無視して考えても、この方向には一つの意味があるかもしれない。

全体を見ると、相談者の位置はそれぞれ違うが『結婚』がらみであるという軸は変化がない。しかし、結婚の手段や形態を問題にする段階から、自分にとっての『結婚』を思いめぐらすという方向に傾斜しつつある。それも、人格の切りむすびや、自分の生活を規定する社会的情况から切れた形で、きわめて観念的な、自分にとってだけの『安定』（安心感）が問題になってきており、具体的対立物であった親や家庭から遠ざかることによって、ある意味で悩みは

内向している。このサブタイトルの変更は偶然にせよ、今日の状況を反映しているかもしれない。とはいえ、やはり社会的な風潮からすると、その話題は著しく歩調が狂っている。六〇年代前半でのマイホーム主義や、後半での核家族化、期待される人間像、七〇年代に入っただけで、家庭の崩壊が風俗的問題とからんで出現している現象にもあまりかわらず、親や家庭、浮気の問題といった古い問題が新しい話として提出されている。

**結婚** 記事量は多くはないが、比較的各月連続して載っている。通覧すると、六三年では『危い結婚シリーズ』と題して、合理主義的マイホームへの警告が、六四年では、『仕事本位よりも家庭中心で……』と称して、心豊かなマイホームへのすすめを、七二年では『結婚・新婚問題点シリーズ』と題し、『共働き新婚さん……』の弊害を、七三年では『幸福な結婚なのにこんなに失うものが多いとは』として、自分の自由を束縛するものとしての結婚が載っている。全体に話題としての時代性がみえる。しかし、ここでも結婚のスタイルとしての形態、手続がとくに六二年、三年にはみられ、七二年では結婚生活の「技術論」が、七三年では私的「不満」がならんでいる。

六三、四年で提出されている結婚生活の「形態・手続」は、一方で『結婚設計の合理主義』——例えば『団地に住み……オール電化……冷暖房完備……自家用車……子どものためのピアノ……』など——の行きすぎを問題にし『合理的花嫁修業の結末は』として『ノイローゼ夫婦の大量生産』などと否定的である。そして、つまるところ『お料理の腕をどうする』というように、とくに女性の家事という役割の再認識をせまる。他方、六三年のマイホーム志向の結婚の例では、『反対です。右向け右の亭主関白』と一応女性の主体性を問題にしながらも『女性の個性を尊重してくれながら、なおかつ男性としてのリーダーシップをとれる人』を望んでいる。『合理主義』もだめ、『亭主関白』もだめ、『リーダーシップのとれる……男性』のために『お料理』の腕をつける女性ということになる。六一年には『同棲のプラスとマイナス』というタイトルがみえる。話題としての目新しさとは別に、内容は『同棲はふえてきた』『失敗と成功の実例』『まだある家と家との結婚』など、家や親の権威に対しての『同棲』の評価はあるが、結論は『結婚というタガが愛情をささえる』『法律上は女性に不利』というように結婚に行きつく。プラスとマイナスが並

置されているのではなく、プラスの側面を「愛情」「結婚」という紋切型で否定することで、結局、マイナスであるということを使う。

## Table 5 結 婚

六一年

- ・同棲のプラスとマイナス……新しい「結婚のあり方」をめぐる……同棲はふえてきた・失敗と成功の実例・まだある家と家との結婚式・反対論と賛成論・結婚というタガが愛情をささえる・法律上は女性が不利

六三年

- ・危い結婚シリーズ・合理主義ばかりである。結婚もその線でいこう。高い土地を買って家を建てるよりは、合理的にできている団地に住み、オール家庭電化はいわずもがな。寝室にはダブルベッドを入れ、多少ゆとりができれば冷暖房設備を完備する。外出にはもちろん自家用車。……これがあるたの合理的結婚生活の理想図ではありませんか？……それが実現するのを祈っています。ただし条件つきで……合理的花嫁修業の結末は・ノイローゼ夫婦の大量生産・オール家庭電化のゆううつ・お料理の腕をどうする。

六四年

- ・現代の結婚・反対です！右向け右の亭主関白・女性の個性を尊重してくれながらなおかつ男性としてのリーダーシップをとれる人！仕事本位よりも家庭中心で生活をエンジョイしたいという意見。……

七二年

- ・結婚・新婚問題点シリーズ・共働き新婚さん六八組中トラブルなしがたった五組とは・家事・金銭・セックス―油断大敵共働きって意外とむずかしいです・セックスのアンバランスは新婚だけにちょっと深刻・「家事は交代でやろう」なんてカッコいい約束はしたけれど

七三年

- ・結婚・新婚問題点シリーズ  
・妻の嫌味、新婚亭主一二八人のこの意外な告白・新婚一年「妻に不満なし」はたった八人だけ

でしたノ・嫉妬深いのはうんざりだが全然嫉かないのも複雑な心境・お化粧をしない妻を持つた夫……さんのこの嘆き・夫婦の秘密を得意気でしゃべる妻の姿に夫の心は……・幸福な結婚なのにこんなに失うものが多いとはノ・ミニスカートから朝寝まで自由が奪れたと感じる新妻が訪問取材八一人中五七人もー・時間をもてあます生活にとまどい・小遣いがなくなり買物に頭をかかえ・姑のご機嫌とりにも時間をとられ

七二年では『油断大敵共働きって意外とむずかしそうです』とはいうものの『家事を交代でやろうなんてカッコいい約束はしたけれど』となり、女性を家事に追いやりながら、生活ではない、結婚という一般論を展開する。そこでは『家事』を中心にした女性の役割に、仕事をするということをつけ加えると、『本来』の夫婦バランスがくずれてしまうという。ただ注目されるのは、ここではじめて「セックス」の問題がみえる。結婚生活が、理念や一般論からおりてきたとき、夫婦関係を支え、円滑にする重要なポイントとしてセックスが登場する。『家事・金銭・セックス』という続き具合は金銭にたいして家事・セックスが対立物とし現われ、共働きの力点を金銭にのみ置いている。共働きの否定を前提にした記事内容は、『セックス』をも女性の職分に分類することになる。いわゆる、セックスは男に向けての技術論なのである。

そして七三年には、女性の発言として『幸福な結婚なのにこんなに失うものが多いとはノ』『ミニスカートから朝寝まで』自由が奪われたと感じる。一見悩みは深刻ではあるが、妻の自由喪失感の原因は『時間をもてあます生活にとまどい』というところであり、結婚生活・家庭を中心に一步もふみ出ない。『失うもの』は独身生活に比較してのことであろうが、それは一向に眼中にない。いじ悪くいえば、『幸福な結婚』のイメージは、ミニスカートもはき、おしゃれをし、眠りたいだけねむり、十分に小遣いを持ち、姑や他人のご機嫌もとらず、さらに時間をもてあまさない充実した結婚ということだろうか？ 不思議なことに、この幸福度測定のものさしに、夫が出現しない。結婚あるいは結婚生活は、現実の基磐から浮きあがり、実際の生活の不満（不安）は、ここでも虚構化している。

一方男性の不満は、『嫉妬深いのはうんざりだが嫉かないのは……』『お化粧をしない妻をもった男の嘆き』など夫は家庭を「慰安の場」に、そこでの妻の役割は一種の緩衝剤である。これに対して妻の不満は、この夫の不満に直接関わってこない。もっと私的で非現実的な感じさえある。その意味で、夫との関りの中での妻の役割をいうまでもなく認めているようにもみえる。

「結婚」記事を時系列に追ってみると、ある意味では社会的情况、風俗的表層に対応しているように読めるが、結婚の現実的基礎からは遠のく。六〇年代前半での高度経済成長は、結婚や家庭に対して豊かで合理的な家づくり、家庭づくりといった、物心両面でのプラスの自立幻想をもたらし、それが崩壊する過程で、生活上の不安・不満といったマイナス面がでてくると「夫婦間のつき合い術」といった技術論が展開される。例えば、七二年での共働きの問題は六〇年代後半から七〇年にかけての経済的退潮期にあつては、共かせぎといういい方が一般的で、とくに家庭経済の補てんという意味での共かせぎであつた。しかし、共かせぎから共働きへの移行は、一方では、夫婦の経済的自立、両性の社会的広がりや自覚する方向でいい換えられた積極的側面があるのだが、ここでの記事あつかいは単にことばが替ったにすぎない。むしろ、七〇年に入り、共かせぎという意味での共働きですらその現実的必要性は切実になってきているにもかかわらず、それを否定することで、結婚の今日的な理念を強調する傾向すら見える。ここにきて共働きという対象は、結婚を説明するためのシンボリックな「語」になっている。内職がパートと言いかえられたように。だがそれ以上に、結婚そしてその内容そのものがシンボライズされている。七三年での女性の悩みは、対人的実相が見えない。結婚をいうまでもない前提としたとしても、結婚の理想像・一般論すらもかくれている。六〇年代でみられたように、結婚の価値軸をめぐっての対立や同調、あるいは理想は中心からはずれ、私的不満（不安）が無前提に現われる。したがって「夫婦間のつきあい術」といっても、それは夫婦関係を意味づけるという風なものではなく、不満のうらがえしとしてのくもをつかむような期待ということになってしまふ。

男・セックス 六三・六四年では、『男性のみせかけに強くなる術』『性に関する五〇のことばをあなたに』など



異性としての男の観察術や性知識に関する記事が多い。また、性―自分の身体についての悩みなどがあげられる。六八年頃から、『あげてよかった』『男性ヌード観賞グループの女性たち』などゴシップめいた記事が散見される。しかし、全般には、セックスを中心にした記事は意外に少なく、七〇年代のポルノなどの性風俗の波は見られない。六八年のセックス記事でも、内容をみると、「愛」とか「生き方」を問題にし、それを強調しているのが特徴的である。このいわゆるセックスのあつかいは、六八年に登場した劇画の内容に近い。一見少女向劇画であるが、一つの恋愛劇の中にセックス描写を挿入して展開しており、女性週刊誌の中では目立っている。したがって、他の記事は「身の上相談」や「作法・マナー」（男性とのつき合い術も含む）や「ゴシップ」に分類してもいいような内容である。

作法・マナー この項目はみるべきものが少ない。年による変遷がみられず、一貫して『一人で美しくきものを着る』（六一年）から『意外にやさしいテーブルマナー』（七〇年）などが交互に出現する。七三年では、六一年のタイトルと同じ記事内容が現われている。この項では、職場や友人関係での対人関係についての記事を予想したのだが六六年に『一等B G短期完成コース』というタイトルがみられただけである。

女・生き方 記事が少ないが、この項は、次の二つの女性のタイプを、年代にかかわらず出現させている。自立型……女でありながら独力で財をなすといった出世物語。例えば『女の旅路……人われを億万長者と呼ぶ』（六三年）『一六才で上京、株でもうけた金を元手に、年収五億円の子連れ女社長のお金儲け』（六八年）などで、いわば男まさりな女性像である。次いで献身型……社会奉仕や男につくす女性の形である。この二つのタイプをつなげてみると、忍耐よくひたむきであり、かつ強くたくましいという一つの女性像が浮かびあがってくる。

皇室 女性をあつかった記事は、全般に「結婚」について言及してはいるものの、家族や育児についてはあまり問題にしていない。唯一「皇室」記事がその欠けた部分をおぎなう形になっている。六四年『常陸宮の結婚』特集から

記事は子どもに移行する。六五年『浩宮さまはいっしょに遊べる弟君をお望み』『ナルちゃんしっかりノ皇太子さま美智子さまも楽しい応援』。六六年『ママにそっくりな礼宮さま、もうママが分かる：アーヤちゃんいっときもそばを離れぬ浩宮さま』。七〇年までの記事は、皇室での子どもの話題、そして家族の話題が続く。

とくに、六〇年前半の「女性記事」で、プラスチックボールであった家庭のイメージが崩壊していく中で「皇室」記事は、一貫して、明かるい家庭像、育児像（教育像）を描く。六三年「人づくり政策」、六六年「期待される人間像」と続く、教育行政の筋みちに、非常にみごとに対応しているようにみえる。

## 五 概 括

女性週刊誌のあり方は、量・質ともに形をかえてきている。とくにあつかわれる女性像の展開は、めまぐるしく重層的な相貌をみせている。その個々の特徴については、各項で明らかにしてきたつもりなので、ここではくりかえさないが、おわりに全体を通しての共通項を再確認しておくことにする。本研究の対象である女性週刊誌の最も大きな柱の一つは、「結婚」ということであろう。しかし、その結婚も、現実的、社会的基盤から切りはなされ、また人格をかけた関係としてのそれではない。いわばそれらの角度を切り落すことによって成立する、どうどうめぐり―手続き、形式、閉ざされた関係の中での「つきあい術」的なものである。ただ、情況との関わりが希薄であるというのは、例えば、六〇年前半では「葬し」の項目に、「物価」とか「不況」などといった問題がみられたが七〇年代不況期の「葬しむき」に出合った内容がみえない、といったようなことで、読者をとりかこむ変動する大きな幹には鈍感であるということ。また、風俗現象を横になぜていくような記事あつかいにしても、内容の貧弱さくり返しは、叙述方法の新奇性に隠され、今日的新しさとして錯覚することになる。十四年間意外と停滞した「女性像」を提出している。しかし、「結婚」への傾斜が、観念的であったとしても、現在に近づくにしたがって対象が不明瞭で、非人格化していく傾向に、ある変化を認めることはできる。ただ、それを跡づけるには材料不足であ

る。つまるところ、十四年間の経過は、「結婚」が女性にとって、無条件に行き着く場所であることのくり返してあることは言うまでもない。そして「結婚」というものを無条件的に女性の行き着く場所とみるその視点は、女性自身の運命が結婚によって、つまりは男性によって左右されるものであるという、きわめて非主體的な観念に支えられているということが言えよう。

※前回の調査「女性観調査」については、第四一回応用心理学会に発表したもので、くわしく数字をあげて展開できなかったが、そのレジュメが手許にある。また今回のものについては、資料のまま手つかずにのこっている部分が多い。とくに、内容分析については文中にさかのぼって、今後さらに細かい分析をすることが必要だし、他誌についての比較も試みたいと考えている。なお、前回、今回とも調査研究の主体は、心理学実験室メンバー、心理学研究所、学生サークル心理学研究会の共同によっている。